

群馬県域における石鏃の型式について

大工原 豊

1. 縄文石器の型式とは

1990年代に至るまで縄文石器の体系的な分類と型式設定はほとんど行われていなかった。多くの石器研究は単発、パートタイム的、試行錯誤的な研究、あるいは悪い意味での用途論が多く、発展性の乏しいものであった(大工原 1999・2013)。「縄文石器」という概念すら定義されていない状態であった。そこで、縄文石器の研究の枠組みを作る必要性を痛感し、継続的に研究を行い、技術形態学的視点からの分類と型式設定を行うための概要についてまとめた(大工原 2008)。その中で縄文石器の型式について、個々の器種について設定される「型」と、一連の製作工程で製作される石器系列に対して設定される「式」という概念で重層的に把握することが有効であることを示、器種レベルでの「型」は「石材」・「技術」・「形状」という3要素により認定できることを明らかにした。後・晩期の局部磨製石鏃を対象とした実践的研究を行い、関東型、南関東亜型、中部型といった型式設定が可能であることと、その有効性についても確認した(大工原 2006)。また、石鏃製作を中心とした押圧剥離系列の「式」レベルでの実践的研究についても、前期中葉～後葉の中野谷松原遺跡の事例や、中期中葉の中峠遺跡の石器群を用いて、その有効性の検証を行っている(大工原 2008・2014a)。

現在は縄文石器の時空的指標となりうる石器である石鏃に着目し、特徴的な形態の石鏃に対して型式を設定する試みを行っているところである。しかし、縄文土器研究に例えるなら、まだ昭和初期の型式設定黎明期のレベルにあるのが縄文石器研究の実態である。

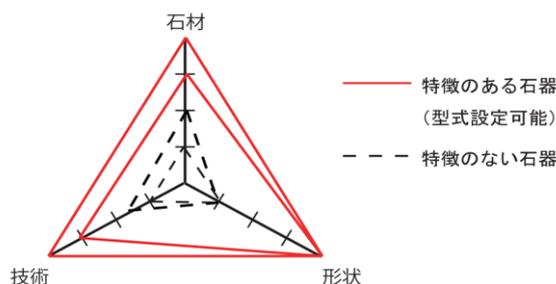


図1 石器型式の構成要素

2. 石鏃の形態

古くから特徴的な形状の石鏃に対して、いくつかの名称が付されてきている。草創期爪形文段階の「長脚鏃」、北海道の早期中葉の「石刃鏃」、中部日本の早期押型文段階の「鋏形鏃」、関東・中部地方の晚期中葉の「飛行機鏃」、東海・北陸地方の「五角形鏃」などがそれである。しかし、これらの石鏃を型式論の俎上に載せて検討するところみはほとんど行われていない。

また、さらに詳細に前述の3要素に分解して観察することにより、他と識別する特徴を有する形態の石鏃が多く存在することが明らかになりつつある。最近の研究では、阿部芳郎氏が早期擦糸文段階の北関東地方には「無袂長身鏃」という形態が存在していることに言及している(阿部 2010)。また、橋本勝雄氏は静岡愛鷹山麓の早期前半(押型文段階)の石鏃に対し、「駿豆五角形鏃」を提唱している(橋本 2014)。いずれも型式論へ昇華できるものである。

3. これまでに確認された群馬県域の石鏃型式

現在、関東・甲信地域を対象に、石鏃多出遺跡の資料調査を行い、型式へと昇華し得る特徴的な形態の抽出作業を進めているところである。石鏃の大部分は標準的な形態のものであり、時期・

地域を示す特徴を有していない。しかし、中には非常に特徴的な石鏃が含まれている。こうした石鏃は、技術レベルが高いものが多いことにも特徴がある。これは技量不足で標準形態の範型から逸脱してしまったものではなく、それとは独自の範型によって製作されていた可能製が高い。こうした特徴的な石鏃を抽出することにより、これまで見えていなかった石鏃の型式が見えてくる。ちなみに、土器型式の研究では範型に忠実な資料を選択して編年研究を行っているが、資料が膨大な縄文石器でもこれと同じように型式論の対象となる資料を抽出することから編年研究を行う必要があるのである。

ここでは、これまでに実施した群馬地域の石鏃型式研究の成果の一端を紹介してみたい。

柳久保型（早期中葉 図2） 一見すると通常の凹基無茎鏃に見えるが、基部の抉り込み加工に特徴がある。まず、平基無茎の三角鏃を作り、基部の両端から中心方向に向けて槌状剥離を施して、抉り込みを行うものである（大工原 2014b）。黒曜石製のものが多く、それらはすべて信州系（和田峠系・星ヶ塔系）である（建石・大工原・二宮 2014）。柳久保遺跡（前橋市）と頭無遺跡（同）で確認されている。

鋏形鏃の崩れた形態に対して、この技法が用いられているものがあるので、鋏形鏃に後続する型式であると推定される。この型式がまとまって出土している柳久保遺跡（前橋市）では、同じ黒曜石製でも標準的な三角鏃は神津島系の黒曜石が用いられており、石材・技術・形状の3要素から識別することが可能である。

安通型（晩期前葉 図3） 約4.5～5.5 cmのサイズの大形やや幅広の凸基有茎鏃で、基部は直線的である。表裏両面に連続的に平行する精緻な押圧剥離が施された精製品である。良質の珪質頁岩が多用されているが、黒色頁岩、チャートなども用いられている。安通・洞No.2遺跡（前橋市）でまとまって出土しているほか、頭無遺跡（前橋市）、瀧沢遺跡（渋川市）、押出遺跡（渋川市）、谷地遺跡（藤岡市）、千網谷戸遺跡（桐生市）、茅野遺跡（榛東村）、矢瀬遺跡（みなかみ町）等で確認されている。しかし、妙義山麓の天神原遺跡には存在していないので、赤城山麓に分布の中心があったと推定される。

なお、青森県是川中居遺跡の数百点の石鏃を実見する機会があったが、その際1点だけ他の石鏃とは石材・技術・形状の異なる精緻な珪質頁岩製の凸基有茎鏃が存在していた。この事例は正真正の安通型と認定し得るものであり、あるいは広域に流通していた可能性もある。したがって、今後はさらに広域にわたって類似資料の確認を行う必要がある。

茅野型（晩期前葉：安行3 a 段階か？ 図4） 2.5 cm前後の黒曜石製の細身小形の凸基有茎鏃で、鏃身の下端部が突起状に突出するものが多い。調整加工は粗雑で、断面形は分厚いレンズ状を呈する。茅野遺跡から集中出土しているが、他遺跡ではほとんど見かけない。未成品では表裏両面に原礫面が残されていて、扁平小形原石からいきなり調整加工を行っている事例が確認できる。黒曜石の流通事情が悪く、制約の多い素材から製作していることが特徴である。

（仮称）押手型（晩期前葉？ 図4） 約5～6 cmの大形の凸基有茎鏃で、黒色頁岩が用いられる。形態的特徴として、先端部が膨らむ。現在、押手遺跡（渋川市）と茅野遺跡（榛東村）で1例ずつ確認されている。また、天神原遺跡でも類似した形態のものが存在する。いずれも遺跡最大の石鏃という点が共通しており、通常石鏃とは用途とは異なるものであった可能性が高い。

（仮称）谷地型（後期後葉～晩期前葉 図4） 細身長身の平基有茎鏃で、側縁部がほぼ平行で、先端部近くで屈曲する。茎部は小さく短い。3例確認され、いずれも黒色頁岩製である。型式を構成する要素は十分満たしているが、まだ類例確認作業を行っていないため、仮称型式の段階である。

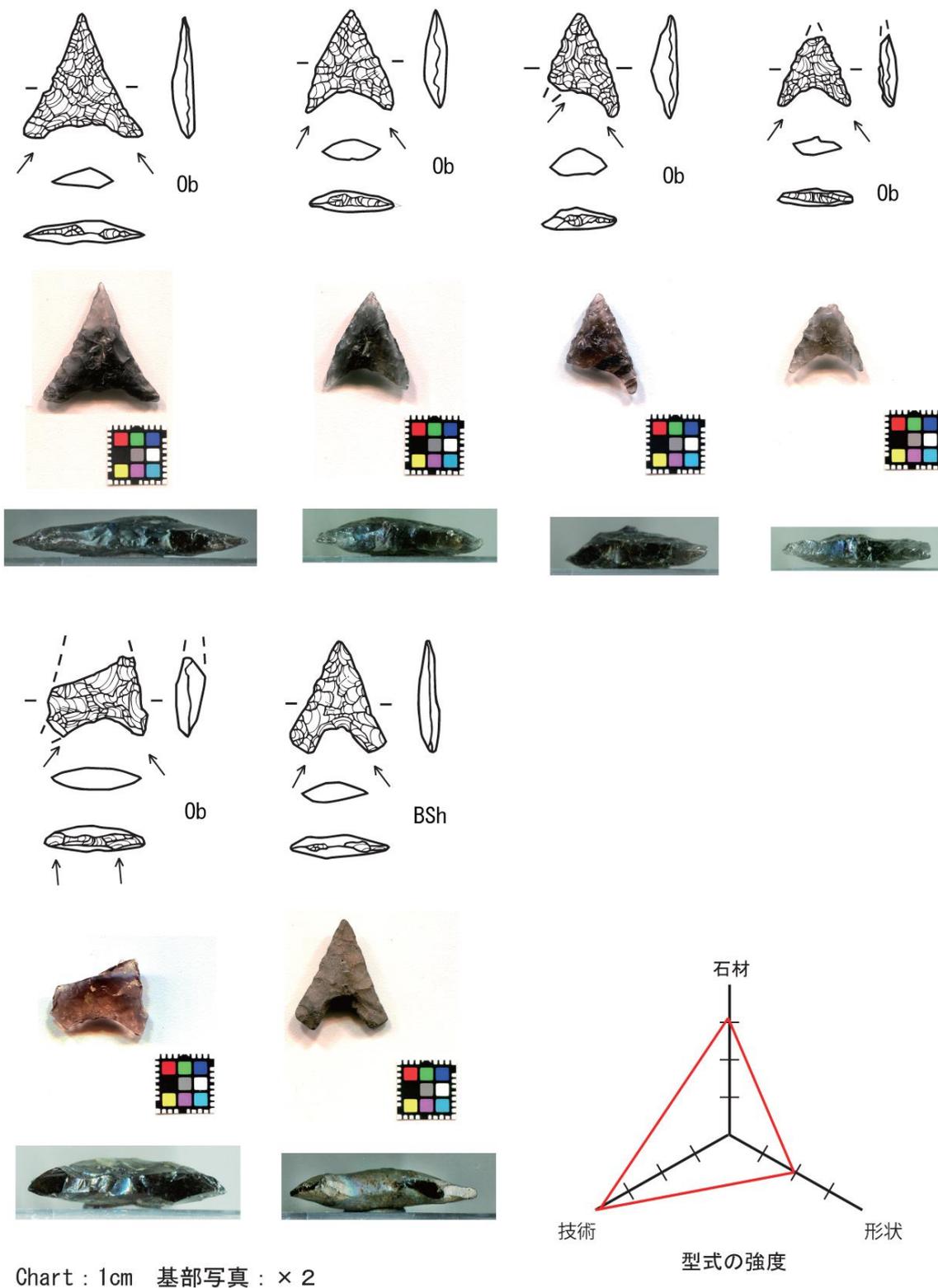


Chart : 1cm 基部写真 : × 2

図2 柳久保型石鏃

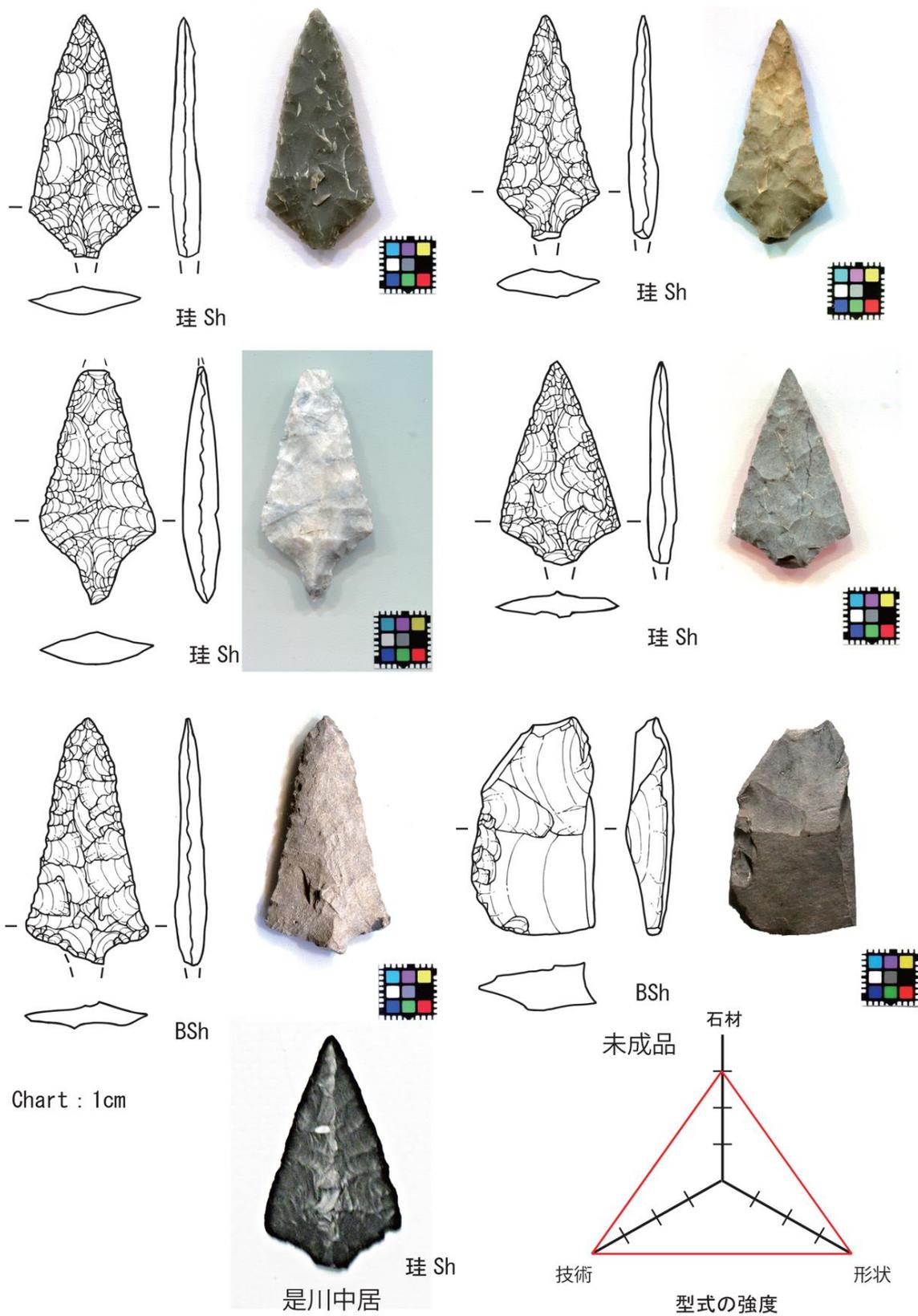


図3 安通型石鏃

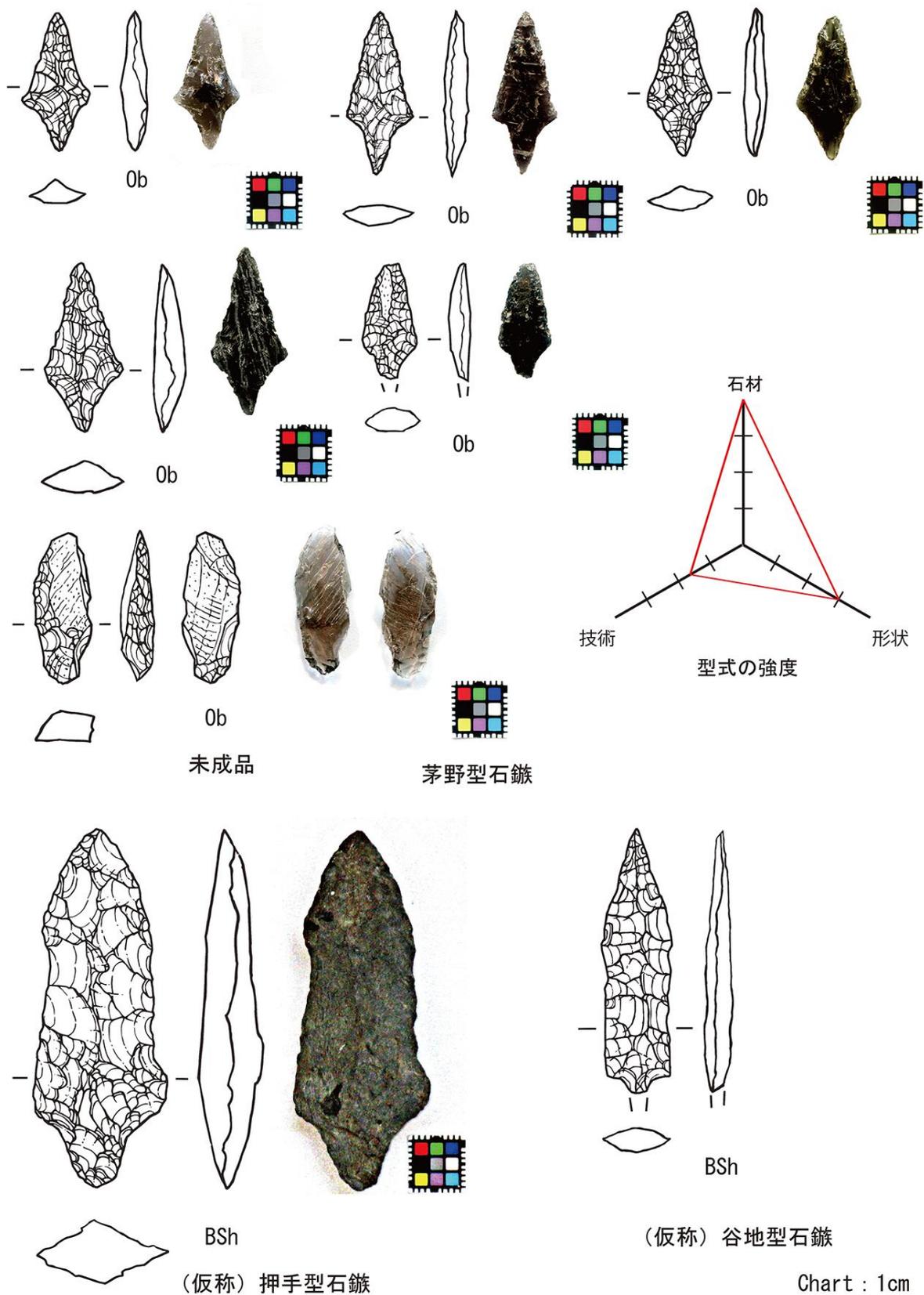


図4 茅野型・(仮称) 押手型・(仮称) 谷地型石鏃

4. 今後の展望

この方法で、南関東・あるいは甲信地方についても特徴的な石鏃を見出し、型式論の俎上に載せる研究を継続して行く予定である。例えば、柳久保型は甲信地方を中心に分布する鋏形鏃の系譜を引くものである可能性が高い。石材も信州系黒曜石であることから型式圏はこの方面まで及ぶことが予想される。

また、南関東では通時代的に神津島産黒曜石が石鏃に多用されているが、前期末葉～中期中葉にかけての時期には、石鏃の素材として幅広石刃（スモール・ブレイド）を連続して剥離する「十三菩提技法」という特殊な技法が存在しており、この技法で作出された石鏃素材剥片が広域に流通していることが確認されている。この場合、「式」レベルでの分析を行わなければ、型式を見出すことはできない。さらに、山梨地域の中期においては、樹脂状光沢のある礫面を残す黒曜石の剥片（ファースト・フレイク）を素材とする石鏃の存在が確認されている。これらの各地域の石鏃を型式論のレベルまで昇華することができるか、それが今後の課題である。

なお、この発表は科学研究費助成事業基盤研究C「石鏃を中心とする押圧剥離系列石器群の石材別広域編年の整備」（JSPS 科研費 25370894）の研究成果の一部である。

* 発表後、安通型の石材を再検討し、原稿と図の石材名をチャートから珪質頁岩に変更した。

引用・参考文献

- 阿部芳郎 2010「縄文時代早期における遊動狩猟集団の拡散と回帰」『移動と流通の縄文社会史』雄山閣 pp.233-253
- 大工原 豊 1999「縄文石器研究の方向性」『縄文時代』10（第4分冊） 縄文時代文化研究会 pp.23-30
- 同 2008『縄文石器研究序論』六一書房
- 同 2006「縄文時代後・晩期の局部磨製石鏃」『縄文時代』17 縄文時代文化研究会 pp.25-50
- 同 2013「縄文石器研究の意義」『考古学ジャーナル』ニューサイエンス社 pp.3-6
- 同 2014a「中峠遺跡第6次調査の石器群について」『下総考古学』23 下総考古学研究会 pp.151-157
- 同 2014b「頭無遺跡・柳久保遺跡出土の石鏃について」『年報』第44集 前橋市教育委員会
- 建石 徹・大工原 豊・二宮修治 2014「前橋市内遺跡出土の黒曜石資料の産地分析」『同上』同上
- 橋本勝雄 2014「『駿豆五角形鏃』の特質とその背景」『静岡県考古学研究』No.45 静岡県考古学会 pp.1-14
（報告書は省略）